雨男

後藤詩門

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
雨男

【Ｎコード】
Ｎ８３１４Ｅ

【作者名】
後藤詩門

【あらすじ】
国会議員の川野太郎は奇妙なものを見つけた。それは気象庁の外郭団体、雨男対策特別監視評議会という特殊法人である。いったいここは……何をする所なのか？

（前書き）

フィクションです。

行政改革推進本部長をつとめる国会議員の川野太郎（かわのたろう）は、これまで生きてきた中で一度も見たことのないような不思議なものを発見していた。
それはとある特殊法人。その名を……雨男対策特別監視評議会というものである。
気象庁所属の外郭団体の一つ、特殊法人であった。

（雨男対策特別監視評議会……なんだこりゃ？）

これが、初めてこの特殊法人の存在を知った時の、川野太郎の偽らざる気持ちである。
雨男、しかも監視評議会とは……いったい何をするところなのか？
またしても怪しげな特殊法人が出てきたものだ。太郎は苦々しく首を振った。

彼は今、不要と思われる特殊法人を整理するために働いている。
行政改革推進本部長とはそのためのポストであり、着任したのは昨年暮れのこと。
自明党総裁、福口康夫から特別な期待をされてこの部署についた太郎だったが、これまでにいやというほど無駄な特殊法人を見つけてきた。

例えばその中には、国土交通省所属の横断歩道白線協会がある。
道路に横断歩道の白線をつけるべきか否かを決定するためだけの特殊法人。
そんなもの市町村に任せろよ！　と言いたくなるが、こんなものに毎年何十億円もの税金が投入されていたのだ。

太郎はあきれてものも言えなかった。もちろん、即刻廃止にした。
また別の例としては、文部科学省所属の物作り特別予備校をあげることができる。
夏休みや冬休みの宿題工作ができない子供たちのために、本職の大工が特別に指導するという学校。
活動は主に夏休みと冬休み。なのに常駐職員は２０人もいるのだ。建物も立派である。
彼らの人件費だけで、かなりの税金が無駄に使われていたことになる。
宿題くらい自分でやれ！　それが無理なら親が手伝え！
なんで出来の悪いくそ餓鬼に貴重な税金をつかわにゃならんのだ。太郎はあきれかえる思いであった。
こちらも廃止が決定している。
ちなみに、なぜ予備校と名づけたのかは不明である。

さて、そんな役割を担う太郎であったから、この雨男対策特別監視評議会などという訳の分からぬ特殊法人は、決して許すことができなかった。
さっそく、気象庁の担当官を呼び出して問い尋ねる事にした。

＞ｉ１８７９８―２４９８＜

驚くことにやってきたのは気象庁長官、梅田前男（うめださきお）であった。
庁のトップがやってくるとは……びっくりした太郎。
ひょっとしたら、この特殊法人は気象庁にとってかなり重要な部署なのだろうか？
少し気後れする。だが、すぐに気を取り直した。どんなに省庁にとって重要であろうが、国民にとってそうでなければ意味はない！
太郎は、自らを奮い立たせた。

自明党本部にある自らの執務室に梅田長官を通すと、ソファーに向かい合って座る太郎。
そして、秘書がお茶を持って来るより前に、待ちきれない彼は開口一番こう言った。

「梅田長官、困りますよ！　こんな変な特殊法人を造っちゃぁ……いったい何をする所なのかね、この雨男対策特別監視評議会とは？」

ズバリと尋ねる太郎に気象庁長官はもごもごと口を籠もらせる。

「は、はぁ……雨男対策特別監視評議会ですか？　ええっと、あれは確か……何でしたかな？　よく覚えていませんね。なにしろ外郭団体や特殊法人は幾つもありますので……まぁ、よく調べまして、いずれまたご報告するという事でどうでしょう？」

煮え切らない様子の梅田長官に太郎は眉をひそめた。
いつもこうなのだ。
これがいわゆる、抵抗勢力の反対というものである。
各省庁とも自らのテリトリーが小さくなるのは望まない。そこで官僚たちは、のらりくらりと追及をかわしてやり過ごそうとする。
現にこの長官も、雨男対策特別監視評議会を知らぬは訳ないのだ。なぜなら、彼の息子はこの評議会のメンバーである。すでに調べはついていた。
白々しいったらありゃしない。
まったく、役人根性とは困ったもの。

「梅田長官、とぼけないでいただきたい！」

「いや、とぼけてなど……」

梅田はわざとらしく肩をすくめる。
太郎は机をドンと一つ叩くと、立ち上がってこう言った。

「それがとぼけているというんです。では、お聞きしますがあなたのご子息、梅田友引（うめだともびき）君はいまどこにおられますか？」

その言葉に、初めて梅田が困惑の表情を浮かべた。目の前には仁王立ちの太郎がいる。そして、その瞳は確信に満ちていた。

「ぐっ……そ、そこまでお調べでしたか」

梅田はがっくりと肩を落とした。
そして、すっかり白くなった頭を太郎に見せ、深々とお辞儀する。

「申し訳ありませんでした。実は私の一存で……息子を気象庁の外郭団体、雨男対策特別監視評議会へ出向させました。そのため、どうしてもこの特殊法人は潰したくなく、下らぬ小細工を弄してしまいました。本当にすみませんでした」

なるほど、下らない親心というやつか。
太郎はゆっくりと元のところに腰かけた。

どこの世界にもコネがあれば無理がきく。親が気象庁の長官ならば、どんな馬鹿でも気象庁所属の特殊法人に就職できるのだ。
いやな世の中だ。
そして、息子の就職した法人を守るため、わざわざ梅田長官自らが出てきたということか。ご苦労なことである。

だが……まてよ。

「梅田長官、今あなたなんとおっしゃいましたか？」

「本当にすみませんでした……ですが？」

「いや、その前、ご子息が……出向したと言われましたか？」

「ああ、言いましたよ。それが何か？」

出向させた……という事はつまり、彼の息子は国家公務員だったのか？　そうでなければ使わない言葉だ。

では、馬鹿息子が大学を卒業しても就職先が無いから、長官の権威を使って無理矢理気象庁の外郭団体へ押し込んだという訳じゃないのか？

太郎は率直に聞いてみた。すると……

「ええ、息子は外務省の外交官だったんです。中国大使館に勤めてました。でも、事情があって……気象庁に引き取ったんです」

なんと、外務省とは！

太郎は目をむいた。昔から国家公務員の中でも大蔵省（現財務省）に並んで難関な外務省に入るとは……コネなんかじゃない。彼の息子は本当に有能なのだ。

しかし、その外務省キャリアがなぜ気象庁に？　それも外郭団体に出向せねばならなかったのか？

まったく分からない。何か不祥事でも起こしたのだろうか？

太郎の疑問に梅田はすぐに答えた。

「その理由は……息子の口から言わせましょう。たまたま今日は東京にいますので、すぐにここに来るよう命じますから。そうすれば、雨男対策特別監視評議会という特殊法人が何故必要だったのかが…

…お分かりいただけるでしょう」
寂しそうに笑うと、梅田長官は背広の胸ポケットから携帯電話を取り出した。
連絡はすぐにとれた。
そして、長官の息子は３０分もかからずやってきたのだ。
いつの間にか降り始めていた雨に、ずぶ濡れとなりながら……

やってきた梅田友引は本当にいい男であった。
ずぶ濡れではあったが、そこがまさに水もしたたる良い男といった感じである。
爽やかであり屈託がなく、まるで春風のようなタイプの人間だと太郎は思った。
「お待たせしてすみません。私が雨男対策特別監視評議会の梅田友引です」
「やぁ、わざわざすまんね。私は自明党の行政改革本部長をしている川野太郎だ。よろしく」
「はい、お名前はよく存じております。よろしくお願いします」
固い握手を交わしながら太郎と友引はにこやかに笑いあっていた。
お互い一目で気に入ったらしい。
２０歳近く年は離れているが、この日から二人は莫逆の友となったのだ。
「さっそくだが、君はなぜ外務省から気象庁の……しかも外郭団体などに行くようになったんだね？」

「あれ、親父から何もお聞きになりませんでしたか」

友引はとなりに座っている父親をちらりと見る。
気象庁長官はそんな息子にウインクしてみせた。イタズラっぽい笑みを浮かべて。
どうやら、お前が説明しろとその目は語っているようだ。

「では……本部長、私の方からご説明させていただきます」

そして、友引は話し始めた。

「昔から私は雨男でした」

「雨男？　つまりそいつがいると、運動会や遠足が必ず雨になるという、あの雨男か？」

「はい」

素直にうなずく友引に太郎は膝を打って大笑いした。
こんなに笑ったのは久しぶりである。

「わははははは、いやぁ可笑しい！　つまり、君は子供の頃から雨男だったから、雨男監視なんたらに入れられた訳か？」

「端的に言えば……その通りです」

「わはははは、面白いジョークだ」

「……」

ひとしきり笑うと、太郎は気がついた。
梅田親子の様子が重苦しいものになっている事に。
まさか、冗談じゃないのか？　そんな二人の様子にふと不安に駆られる太郎。
笑うのをやめた太郎を見て、友引が話を続ける。
「本部長、運動会や遠足だけならいいんですが……私の場合それだけじゃなかったんです」
「なに？　まさか君のいるところは毎日雨がふったなんて言うんじゃ無いだろうな？」
「いえいえ、子供の頃はそれほど酷くなはありませんでした。雨はまぁ、三日に一回くらいでしたね」
「三日に一回？　確かにちょっと多いと思うが……考えすぎじゃないのかね？」
友引はじっと太郎を見た後、目をふせて軽く頭を振った。
「運動会、遠足に加えて、始業式、終業式、卒業式すべて雨です。幼稚園の頃の芋掘りやお遊戯会も雨。小学校では臨海学校に夏山キャンプ、中学校のスケッチ大会みんな雨なんですよ。そしてもちろん修学旅行も初日から最後まで土砂降りの雨です。こんなこと偶然におきますか？」
「た、大変だったんだなぁ。しかし……その雨男だが、君とは限らないんじゃないか？　例えば君のクラスの誰かかもしれないだろう」
「私も最初はそう考えました。でも、残念ながら……やっぱり私だ

ったんです」

「何故それが分かる？」

　太郎は食い下がった。どうしても信じられなかったのだ。いや、信じたくなかったのかもしれない。

　しかし、次の友引の言葉には自説を引っ込めるしかない太郎であった。

「クラス替えの度に、容疑者は固まっていきました。例えば私の通った小中学校では、スケッチ大会はクラスごとに行き先が違います。そして、私のクラスの行く所だけ雨が降るんですよ。合計９回も雨に祟られた生徒児童は……私だけなんです」

「な、なるほど」

「それに私が高校生の頃、流石に異常に気づいてくれた親父も調べてくれたんです」

　その言葉に、それまで沈黙を保っていた梅田長官が口を開いた。

「間違いありません。理由は分かりませんが息子は……間違いなく雨男です。気象学的にも統計学的にも、有り得ない確率で彼のいる所に雨雲が発生するんです」

　理路整然とした解説だった。太郎はもう彼が雨男であることに疑問を差し挟むことはなかった。

「でも、子供の頃は良かったなぁ。雨男といっても平均すれば三日に二回は太陽が見れました。でも今は……」

ふせ目がちに語る友引に太郎が興味津々の様子で聞いた。
「友引君、今はいったいどのくらいの確率で雨が降るんだい？」
「……100パーセントです」
深い沈黙が太郎の執務室を覆った。
つまり、彼は二度と太陽を見ることができないのか？
なんと哀れな、太郎は同情する。
何とかならんのだろうか？
その時、太郎の脳裏にあるアイデアが閃いた。
「そうだ、外国はどうなんだ？　例えばアフリカや中東の砂漠に行っても雨はふるのだろうか？　となりの中国にも砂漠はあるぞ、ゴビ砂漠だ！　あそこはどうなんだ？」
突如思いついたナイスアイデアに、つい声が大きくなる太郎。
だが、雨男の友引は苦笑いを浮かべていた。
「本部長、私が気象庁の外郭団体に出向する前、どこにいたかご存知ですか？」
「どこにいたか？　ああ、そう言えば中国大使館勤務だったな……つまり、ダメだったのか？」
「ええ、ご想像の通りです。中国では主に砂漠や雨の少ない地方にいましたが……大雨につぐ大雨で、ついには洪水がおきてしまいました。どこからか私の噂を聞きつけたのでしょう。洪水があったすぐ次の日。非公式ではありますが、中国政府から日本政府に私を国

外に退去させてくれるよう要請があったそうです。いくら砂漠でも雨が降りすぎるのは良くないんですって。むしろ、その土地の人たちは雨が降らないことの方が普通で、逆に長雨が降ると困るそうなんですよ」

「……そうか、そうだったのか」

太郎はもう、この若くて有望な元外務省キャリアの青年を直視する事ができなかった。
あまりにも悲惨な運命。
神様がいるとすれば、ひどい十字架を背負わせたものだ。
だが、青年は穏やかであった。その姿はまるで悟りを開いた達磨のように太郎には見えた。それほど、友引は落ち着いていたのだ。

「それからです。私は外務省から気象庁に移されました。行き場のない私を親父が引き取ってくれたのでしょう。そしてすぐに特殊法人、雨男対策特別監視評議会に出向したのです。評議会の仕事ですか？　それは旅行することです。行くあてはありません。でもとにかく日本中を旅するんです。一所にとどまることは許されません。長雨の被害に日本国民をさらすわけにはいかないからです。時々、日照り続きの土地へ行くように言われる事があります。そんな時はなんだか嬉しいんですよ。いつもは嫌われている雨男の自分が、この時ばかりはヒーローになれた気がして……でも、日本って基本的に雨が多い国なんですよね。だから、私を必要としてくれる時なんて、めったにありません。評議会なんてかっこいい名前ですが、メンバーは私一人です。監視って言ってますが、監視するのは私でその対象は私自身です……なんか矛盾してますよね。でも、まぁ自分自身を見つめるにはいい機会でした。最近はこの仕事……仕事って言えるかわかりませんけど、まぁ楽しんでやってました。でも、あなたに見つかってしまった。自明党の行政改革本部長として、あな

たには責任がある。いらない特殊法人を整理するという重い責任が。私は……この雨男対策特別監視評議会が潰されたとしても文句はありません。もちろん日本国民のため一人旅は続けますが、何とか税金のお世話にならずにやってみますよ」

友引は涼やかにこう締めくくった。

「明日にでも退職届けを出します。これからは行く先々でアルバイトでもしながら旅行資金を稼ぎます。ですから本部長、どうか心おきなくおつとめを果たしてください」

その言葉を聞いた太郎は、もうダメだった。

すくっとソファーから立ち上がると、彼は雨男の友引に握手を求めた。

つられるように雨男も立ち上がると、怪訝な顔で握手に応じる。

そして、自然と抱き合う二人。

太郎は言った。

「何を言うか、友引君。君は立派な仕事をしてくれている！　この特殊法人は絶対に潰させないから安心したまえ！　いや、それどころか予算を増やしてやる。日本国内だけじゃ飽きるだろ？　世界中を回ってきたまえ、君の働きにはその価値がある！」

「か、川野本部長……ありがとうございます！」

こうして二人はしばらくの間、感動の涙と共に抱きしめ合っていた。

その傍らで、友引の父親、梅田気象庁長官がほっとした顔で二人

を見つめている。
すべてが丸く収まった瞬間であった。

さて、その後のはなしである。
国会議員、川野太郎の宿舎には、近頃外国からのハガキがよく届くようになっていた。
親友となった雨男、梅田友引からのものである。

「あなた、また友引さんからハガキが来てますよ」

妻がキッチンで朝食を取っていた夫の元に、写真がプリントされたハガキを持ってきた。
最近太郎は海外からの雨男のハガキを心待ちにしている節がある。それを敏感に感じ取った妻は、夫が何をしていてもこの海外からのハガキを届けてあげる。
太郎は慌てて箸を置きハガキを受け取る。そして嬉しそうに呟いた。

「友引君、元気にしてるかなぁ？」

友引はいつも外国の風景をバックに自分の姿をカメラに写して送ってくれていた。
残念ながら景色は全て雨模様なのだが、そんなことは太郎にはどうでもよい事であった。
大切なのは友引が元気にしているかどうかなのだ。

だが、そんな夫の様子に妻が困惑しながらこう言い添えた。
「あなた……どうやら今回は、友引さん写ってないみたいですよ」
「何、本当か？」
太郎は受け取ったハガキを見た。どうやら今は北極圏にいるらしい。猛烈な吹雪の写真、その奥の方にかろうじて北極熊が見える。
だが確かに友引はいない。
いったい何故だろう。
不安が頭をよぎる。
だが、それもつかの間。太郎はすぐに笑い始めた。
「わはははは、なんだぁ、ちゃんといるじゃないか！」
「ええっ、どこにですか？」
「ほら、ここさ」
太郎が指さしたのは写真の真ん中に鎮座している雪だるまであった。
いや、それは雪だるまではない。
それこそ友引なのだ。
実は、雨男たる彼の周りには当然雨が降る。だが、北極圏ではそれは雨から雪に変わる。その雨ならぬ雪にまみれた彼が、まるで雪だるまみたいに見えただけなのだ。
「相変わらずの雨男だなぁ、いやこの場合は雪男か。わはははは」

太郎は大声で笑った。どうやら元気そうだな。
これでいい、これでいいんだよな。
太郎は遠く北極圏にいる親友に、今日もまた勇気づけられた気がしていた。
「さぁて、仕事に行ってくるか」
東京は今日も日本晴れ。きっと明日もそうである。いつかあの雨男が帰ってくるその日までは……

（後書き）

この話は実在の人物、団体とは一切関係ございません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8314e/

雨男

2011年10月4日20時07分発行